

SAOMH

メタルギア教の教祖オティヌス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モンスターハンターワールドをやっている、SAOの世界でVRMMOとしてプレイしたらどうだろうかという、安直な思いつきのもと書いてみました。リアルの関係上、キリのいいところまで書こうと考えています。文才0ですが、そこを踏まえて読んでくだされば幸いです。感想及びアドバイスを待っています。

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
18	12	7	3	1

第1話

桐ヶ谷家 朝にて

「ねえ、お兄ちゃん！これ見てよ！」

「どうしたんだよ、スグ。そんなに興奮して。新しいイベントの発表でもあったのか？」

「違うよ！ほらココ見て！ココ！」

朝食のさなか突如興奮し始めた妹、桐ヶ谷直葉からタブレットを受け取った兄、桐ヶ谷和人はモニターに目を走らせていくうちに驚愕をあらわにした。

「大手ゲーム会社カプコンがビッグタイトルのVRMMO化の緊急発表?!ゲームタイトルはMH0【モンスターハンターオンライン】！狩猟ライフは画面から仮想空間へか・・・！」

一通り確認し終わったのか、タブレットを返すとコップに注がれた牛乳を飲み干し、呼吸を落ち着けると、ニマニマとニヤついている直葉に真剣な顔をして、

「お、おいこれは一体どういうことなんだ。こんなビッグニュース初めて聞いたぞー！」

「それもそうだよ！だって発表があったのは深夜の4時頃だもん、まだ誰も知らなくて当然だよ！」

今日の中で最大の出来事に驚きつつも、頭の中で整理しながら朝食を食べていく。

要点をまとめると

・2022年にモンスターハンターというタイトルをVRMMO化しようとする企画があったものの、SAO事件が起こったせいで凍結状態になっており、アミューズフィアやザ・シードのおかげでVRMMOの人气が高まりつつあることを感じて再検討した結果、正式に製作する事が決定。

・しかし、初の狩猟ゲームのVR化ということもあって今のプレイヤーに受けいられるかが不明であり、そのためにベータ版のプレイヤーの募集を始めるということ

・ベータテスターに選ばれたプレイヤーは製品版の先行購入権が貰えるとのこと。

これを見逃さないゲーマーはいない。まして大手ゲーム会社のビッグタイトルのベータテストの募集なら、画面で遊んでいた元ゲーマーもたくさん食らいつくだろう。

「しかし、募集か・当然皆と一緒にプレイしたい訳だけど、カプコンにコネがある知り合いなんて心当たりがないし・・こればかりは運で出してみるしかないかもなあ・・」

どうしたものかと頭を抱えていた二人だが、その問題は思わぬ展開となつて解決することとなる。

「ん、スグ。電話鳴つてないか?」

「あつ、ホントだ。出てくる。・・つてお母さんどうしたの?」

『直葉!和人そこにいる?』

「え?どうしたの急に?」

『いいから替わって!一刻を争うわ!』

「え?!わ、分かった。お兄ちゃん、お母さんが替わってだつて」

「ああ、分かった。替わつたぞ母さん『和人!カプコンのニュース見た?』おわっ!み、見たよどうしたんだ?そんなに慌てて?」

『今さっき、カプコンの件のゲームに関わっている人を取材してたんだけど、その人にVRMMOをしている人を紹介してくれないかって頼まれたのよ。今手元に抽選前のベータテスト権がいくつか残っているから出来れば、モンスターハンターをやったことが無い若い人を紹介してくれて。あなた達やお友達の皆はやったことがないんじゃないの?明後日には紹介しなくちゃいけないの!明日までに聞いておきなさいよ!それじゃ!』

一方的に話されたが、言いたいことは分かった。

「お兄ちゃん、お母さんなんて?」

不思議そうに聞いてくる直葉に和人は、

「スグ、明日奈達に連絡だ。モンスターハンターオンラインのベータテストに応募してみないかって」

ゲーマーならではの楽しみを浮かべた表情をしていた。

第2話

ベータテスト募集から二週間後、頭に被っているアミユスファイアに繋がっているデスクトップパソコンにカプコンから送られてきたダウンロード用のパスワードとアミユスファイアのIDをホームページに入力し終え、後はログインするのみとなった和人は底知れぬ期待を感じていた。

「ベータの初日に参加できるのは明日奈にスグ、詩乃にストレアか：まあ、様子見もかねておくか」

そう呟くと、改めて天井を見据え、あの言葉を唱える。

「リンクスタート！」

ワイワイ、ガヤガヤ

「ん、これは一体・・・？」

まず最初にキリトが目にしたのは船の甲板の上で、一人一人が全く違う初期装備を身に纏ったプレイヤー達だった。キャラネームを決めた後、今までのモンハンシリーズの集大成ということもあって今ま

での初期装備を選ぶことが出来るようにした結果こうなったのだろう。キリトはブレイブシリーズという装備を選択した。

「あ！キリト君！ここにいた！」

声が出た方を振り向くと、妖精の世界ALLOのアバターで来たであろう、リーファがいた。

「リーファも無事にこれたらしいな。ってその装備は？」

リーファの装備は編み笠に剣道の防具のような形状と色で、和を感じさせる装備だった。

「ユクモシリーズっていうんだって。なんか気に入っちゃて。」

「そうだな。剣道の防具に似ているもんな」

「あつ、キリト君！」

「ヤッホー！キリト」

「それにしても、ものすごいプレイヤーの数ね。探すのに苦労したわ」

「アスナにストレア、シノン！もう来てたのか！」

「こんいちはい！アスナさん、シノンさん、ストレアさん！」

後ろから呼ばれた声に振り返ると、各々装備を身に纏った三人がいた。

アスナは外国の寒い地域に住んでいる人たちが身に付けていそうな白色の防寒着のような装備だった。

「私はマフモフシリーズを選んでみたよ！とても暖かそうなもの！」

「おお・・・、白色とモコモコ感が良さそうだな！似合ってるぞ！」

「キリトく、私の装備も見てく」

ストレアの装備は冒険家が身に付けていそうな装備だった。

「どうキリトく？あたしの装備はレザーシリーズっていうんだって。似合ってるく？」

「あ、ああ、似合ってるよストレア・・・って近い近い！」

「私はどうかしら、キリト？」

シノンの装備は白い制服の上に白いターバンを纏ったような装備だった。

「私の装備はベルダーシリーズね。ここに来るまでに他の女性プレイヤーはこの装備が多かったわ。」

「へえ、そんなに多かったのか。狩猟ゲームのハズなのに・意外だな」
「多分、狩猟以外で楽しむために来てるんじゃないかな」

「狩猟以外・・どうということなんだろうな？」

と、疑問に思ったのも束の間、突然ドーンという銅鑼を叩いたような音が辺りに響いた。

「なっ、何？」

「何だよこの音？」

「これ、大銅鑼の音じゃないか？」

と周りのプレイヤー達は騒ぎ始める。

「はーい！皆さん！ちゅーもーくー！」

大きな声が船首の方から聞こえてきた。声の主は20代ぐらいの女性で華やかなドレスを身に纏っていた。

「この度は、モンスターハンターオンラインベータテストへの参加、ありがとうございます！私、皆さんのガイド役を務めさせていただくマロウといたします。我々が今この船に乗って目指している場所はクレイダ諸島。海底火山の影響で出来た島であり、森林に乾燥地帯、さらに地下へ続く巨大な洞窟があるなど、多様性に富んだフィールドです。当然フィールドにはあらゆるモンスターが存在します。そのために必要なのは、武器です！皆さん、左手を振ってください。」

キリト達や他のプレイヤーが指示通りにすると、ウィンドウが表示され、そこには現在のステータスが表示されていた。

「まず、マークの項目をタッチしてください！」

タッチするとベータテスト参加者用セットというメールが開かれ、武器を選んでくださいと表示された。

「フィールドに出る時は必ず武器を装備しなければなりません！では、好きな武器を選んでみてください！」

武器は14種類あり、大剣、太刀、片手剣、双剣、ハンマー、狩猟笛、ランス、ガンランス、スラッシュアックス、チャージアックス、操虫棍、ライトボウガン、ヘヴィボウガン、弓から一つ選んでくださいとあった。

キリトは双剣：ツインダガー、アスナは片手剣：ハンターナイフ、

リーファは太刀：ユクモノ太刀、ストレアは大剣：バスターブレイド、シノンは弓：鉄弓にした。

「皆さん、武器が決まったようですね！では最後に一つ。」

プレイヤー達が静まり返る

「このモンスターハンターオンラインはただ狩るだけではありません。狩ること以外でも楽しめる。それがモンスターハンターオンラインの魅力です！」

言い終わると同時に、周りのプレイヤー達が青い光に包まれて消えていく。どうやら転移が始まったらしい。

「それじゃ皆、また後で」

「うん」

「わかったわ」

「はい！」

「りょうかーい！」

そして甲板の上から誰もいなくなった。

第3話

気が付くと、キリトは広場の様な場所にいた。

「ここがクレイダか・・・諸島の割にはかなり大きい場所だな・・・」

辺りを見回すと人だかりが多い場所があったので、近寄ってみるとプレイヤー達が掲示板の様な物に一瞬触れ、空中で手を動かしていたのでキリトも試しに真似をしてみると、目の前にクエストメニューというウインドウが表示された。これでクエストを受注するのだろう。

「えーと、今受けられるのは『大樹林の植物調査・薬草5個の納品』と『食糧班からの依頼：こんがり肉1個の納品』、『周辺環境の安全確保：ジャギイ7頭の討伐』か・・・ん、バウンティクエストは複数の受注が可能です。か・・よし、全部受けておくか」

アスナ達と合流できたのはそれから5分後のことだった。

「よし、じゃあ大樹林に向かうとして、最初にどのクエストから始めていく？俺は薬草からこんがり肉、最後に討伐にしようと思うんだけど・・・」

「そうね、その方が慣れるにもちようどいいわ」

「そうだね、イキナリの戦闘はキツイかも」

「私も異論はないわ」

「ねえねえ、早く行こー！習うより慣れろだよ！」

「アハハ・まあ、ストレアの言ってることも確かだし、早速行こうか」

重厚な金属で出来た巨大な柵の門に向かうとロープウェイがでっており、フィールドにはこれに乗って向かうようだ。

「わあー！中は思ったよりも広いんだねー！」

「ストレア、飛び跳ねたりしたらだめよ」

「はい」

「ゴンドラに乗って移動するなんて新鮮ね」

「うわー・・かなり高そう・・落ちたら助からなさそう」

『ジリリリン!!』

パーティーメンバー全員が乗ったのか、ゴンドラが動き始めた。思ったよりも快適で、窓から大樹林のおおよその地形が見えた。大樹林は

カルデラによって出来た地形らしく、拠点よりかなり下の位置にあるらしかった。

「こんなに大きなフィールドだったのか！」

「うわあ！緑がキレイだよ！」

「これだけの地形全体が緑に覆われるのに一体どれだけの長い時間が必要だったのかしら・・・」

それぞれの感想を述べながら、大樹林のベースキャンプに到着した。簡素ながらショップが点在していて、まだ空き地が多く存在していた。

「ここが大樹林・・・もう人が集まっているな」

「キリト君、なんだかベースキャンプなお店が少ないね」

「多分、これも進めていくと関係があるかもしれない。とりあえずバウンティをクリアしよう。」

キリト達はベースキャンプを出て目の前の草原地帯で薬草集めを始めた。

「へえ、一度オブジェクトを取ると一度に入手できるようになってるのか。一度に入手出来る個数は2つってところか。」

薬草を取るたびに、視界の右上に『バウンティ達成まで残り3個』と表示されるためいちいちクエスト情報を見なくてもいいようになってる。

一応、武器の取り回しを確認してみた。この世界には『ソードスキル』が存在しない為不安だったが、その心配は杞憂に終わった。一通りの動きを試みたが、硬直の制限も無く自由に扱う事が出来た。それだけではなく、武器を抜刀している状態だとシステムによるアシストが働く為、自分の背丈以上の武器を問題なく扱う事が出来た。その後、解毒草やウチケシの実と呼ばれる植物等を集めながらクエストの規定数を達成すると、背丈以上の植物が多く生えている湿地帯に来た。そこには群れで葉を食べている小型の草食系モンスター、アプトノスがいた。

「あれがアプトノスか・・・皆準備はいいか？」

「行けるよ」

「いつでも狙い撃てるわ」

「あの大きなのを囲んで倒すんだね」

「じゃあ行くぞ・・今だ！」

草むらからキリト、アスナがターゲットのアプトノスの背後に、走りながら抜刀して左右から切りつける。

『ヴモアア!?!』

いきなりの奇襲に驚いたのか、動きを止めるアプトノス。さらにリーファとストレアによる奇襲も加えて、動きを封じられていく。

「シノシー！今だ！」

キリトの掛け声と共に草むらの中から矢が次々にアプトノスに命中して、体力を削り取った。体力が尽きたアプトノスはその巨体を大きな音を立てながら地面に横たわった。

「ナイスコンビネーション」

ハイタッチしていくキリト達。そしてこんがり肉を作るために生肉を剥ぎ取っていく。腰の後ろに固定装備された剥ぎ取りナイフをアプトノスに突き刺し、円を描くように一周すると『生肉を手に入れました』というメッセージが表示された。これをアプトノスの体が無くなるまですると、生肉が3個集まった。

「よし、じゃあ焼いていくか。まず、アイテムウインドウを開いて生肉を選択。『焼く』を選択すれば肉焼きが始まるか・・・」

アスナ達もキリトに合わせて操作すると目の前にイスと一緒に肉焼き機が現れた。イスに座り、肉焼き機のハンドルを掴むとシステムが検知して、テンポのいい音楽が流れ始めた。香ばしくきつね色に焼けていく頃合いに音楽が止まった瞬間、ファンファーレが鳴った。これを何度か続けると、3個のこんがり肉が各自揃った。

「じゃあ、上手に焼けましたって事で一つ食べようか」

『賛成!』

ウインドウのアイテム欄からこんがり肉を出すと、湯気が出てよく焼けたニオイがした。

いただきます、の声と共にかぶりつく。

「うまいー」

「なかなかリアリティあるね、コレ」

食べつくすと骨がポリゴンとなって消え、視界の左上にある緑色の体力ゲージの下にある黄色のゲージが大きく伸びた。このゲージでスタミナ管理をしているのだろう。

「たしか説明には気力ゲージによって行うアクションがあるみたいね。反対にゲージが無くなると、状態異常になりやすくなるみたいよ」

シノンがスラスラと説明してくれたことに感謝しつつ、最後の目的地であるジャギイ達のいる巣に向かった。既に数人程のパーティーがジャギイ達と戦っているが、小柄な体格に物を言わせて素早く動き、死角に回り込んで攻撃され追い込まれていた。

「かなり賢いみたいだな・・・よし、俺とストレアで前に出る。シノンは援護、アスナとリーファはシノンの護衛に回ってくれ。」

「はいはい、ようやくあたしの出番みたいだね。がんばっちゃうぞ〜！」

「了解。援護は任せて」

「しののんは絶対に守ってみせるわ！」

「よし・・・じゃあ行くぞ〜！」

キリトとストレアがジャギイ達に突撃する。ストレアがジャギイ達に切りかかって群れを分断し、よけたばかりでパニックになっているジャギイをキリトが切りつけ、シノンが矢で仕留めていく。シノンの存在に気付いたジャギイ達がシノンに向かうも、アスナとリーファによって倒される。これを繰り返していくこと10分、クエスト達成の音楽が鳴った。すると突然目の前にウィンドウが表れ、本部かキャンプか。あるいはこのまま探索を続行するかを選択が出てきた。

「一通り終わったことだし、一度キャンプの方に戻ろうか」

「そうね。次のクエストが出ているか気になるし、一度戻った方がいいかもしれないわ」

キリトはキャンプを選択すると、大きな音が近づいてきた。その正体は羽が退化しているせいで、飛べない代わりに足が発達した大きな鳥を引いた荷車だった。それよりも驚いたのが赤いハチマキを巻い

た二足歩行する三毛猫らしき生き物だった。啞然とする一同。その様子に気が付いたのか、チュートリアルの一環なのかは分からないが赤いハチマキを巻いたネコらしき生物が御車台から降りて、歩いてきた。

「もしかしてお前さん達、利用するのは初めてかニヤ？ニヤー達はアイルー。獣人族ニヤ。」

「えつと・・・アイルー？」

「そうにや、ニヤー達もこのクレイドに來たクルーの仲間だニヤ。ニヤー達はお前達ハンターをサポートするのがシゴトニヤ。今ニヤー達がココにいるのはお前達を迎えに來たからニヤ。」

「迎え？どうして？」

「お前達ペーペーの駆け出しハンターを死なせない為にニヤー達がいるのニヤー！詳しい話はキャンプのリーダーが教えてくれるから、サツサと乗るニヤー！」

せかさされるように荷車に乗ると、赤いハチマキのアイルーが角笛を吹き、手綱を操ると鳥が凄まじいスピードで走り始めた。

「ワワツ！ゆ、揺れる！」

「結構早いわねコレ！」

乗り心地はともかく、キャンプに早く帰ることが出来たのでそこはご愛敬という所だろう。こうして初めての狩りは終了した。

第4話

ひどい乗り心地と共に大樹林のベースキャンプに到着したキリト達。立つのもやつとの足で荷車から降り、地面に横たわる。車酔いをしたような顔色で周囲を見渡すと、同じような送迎を受けたであろう地面に仰向けで倒れているプレイヤー達の姿が見えた。中には武器を杖代わりにして移動している者もいた。

「・・・皆・・・生きてるか・・・？」

「う、うん・・・何とか」

「歩いた方が安全だと思っ・・・」

「あの荷車、私は今度から絶対に乗らないわ・・・」

「うくん・・・視界が揺れる・・・」

それぞれの荷車の感想を言いながらようやく立ち上がると、誰かが目の前から近づいてきた。赤色に染めた髪に、欧米人のようなクツキリとした顔。伸長はバスケットボールの選手並みに高く、防具の左腕には赤色の腕章を着けていた。注視してみると、青色のカーソルが頭上に表示されたことから、NPCだと分かる。

「初クエスト」苦労だった。おっと荷車については何も言わないでくれ。今はあれぐらいしか用意できなくてね。俺はこの大樹林エリアを任されている者だ。まあ、エリア長とでも呼んでくれ。さて、ついさつきクエストをクリアしてくれた君たちに俺個人から依頼をしたい。」

すると目の前にウィンドウが表示され、『緊急クエスト：ならず者達の長くドスジャギイ一頭の狩猟』とあった。

報酬にはベースキャンプの設備のグレードアップと書かれていた。恐る恐る皆の方を見てみると、今すぐにもクエストをクリアしたいという気迫が表情に出ていた。無理もない。あんなに揺れがひどい荷車から解放されるなら何としてもクリアしたいだろう。それに、と思いつながら周りのキャンプを見渡した。家屋より空き地の方が圧倒的に多く、その家屋も全てテントで出来ている。ワザと最低限の設備にしたのは、プレイヤーの手で発展させる為だろう。プレイヤーがた

だモンスターを倒すだけではなく、モンスターを倒す事によって同時に何かを得る方がやる気が出る。キリト達はシヨップへ行き、回復薬と携帯食料を補充してフィールドへのゲートをくぐった。

ターゲットのドスジャギイがいるのはジャギイ達がいたエリア3。その道中に植物やキノコを集めて行くことにした。モデリングがしっかりしているのか、リアルのスーパで売っているキノコ類と変わらない程の質感をしていた。するとリーファが思いだしたのか、見るからに一口食べただけでもヤバそうなキノコを肉焼き機で焼き始めたのだ。

「お、おい！焼けば食べられる訳じゃないぞ！」

「リーファちゃん、流石にそれは止めたほうが・・・」

「同感ね。死んでも知らないわよ」

「へえ、リーファはチャレンジャーだね」

「大丈夫だよ！解毒薬もあるし！」

キリト達三人？の制止も聞かず、一気にかじりついたリーファ。すると予想外の反応を見せた！

「あれ!?コレ結構美味しい！」

「何だって!?!」

「本当に大丈夫!?!気持ち悪くなってるない!?!」

「一応、解毒薬は飲んでおきなさいよ」

本当に大丈夫なのかキリト、アスナ、シノンが慌てていると、一人だけ落ち着いていたストレアだけがリーファに起きていた異変に気が付いていた。

「アレ、リーファの体力ゲージに剣みたいなのが付いてる」

「あつ、ホントだ。ナニコレ?何かのバフ?」

「あんなキノコを食べてバフなんて・・・リーファ。さつき食べたキノコ、まだ持つてるか?」

「うん、あるよ。えーっと、ドキドキキノコ?食べるとランダムで特殊なバフが発動する、って」

リーファが食べたのはドキドキキノコというキノコだった。特に害はないようなので皆で焼いて食べてみることにした。

最初にキリトが食べてみた。キリトはスタミナの減少を抑えるバフが。

「これは・・・うん、歯ごたえもしつかりしていいな。後で沢山拾っておくか。」

次にアスナが。アスナは移動速度アップのバフが。

「へえ、美味しいね！これならいい料理が作れそう！」

そしてシノンはりーファと同じ攻撃力アップのバフが。

「この見た目でこの旨さ・・・驚かされるわね・・・」

最後にストレアには防御力アップのバフが追加された。

「うくん、この世界には美味しい食べ物沢山ありそうだね〜！」

各々満喫していた。アイテムウィンドウを確認してみると、食べる毒状態になる毒テングダケに麻痺状態になる麻痺ダケ、常時熱を発するニトロダケなるものがあつた。即席キノコツアーも終わり、4人は狩りを再開した。エリア1を抜け、草食モンスター、アプトノスがいるエリア2へ行くと前とは違う光景だった。アプトノスの群れが固まっていたのだ。小さい子供達を体の大きな大人達が囲んで守っており、草も食べずに警戒していたのだ。あまりの尋常さにキリト達は背の高い草むらへ身を隠した。息をひそめながら、辺りを見渡す。

「一体どうしたんだアイツら？まるでハイエナを警戒するシマウマみたいじゃないか」

「もしかして、ドスジャギイを警戒しているのかな？」

「ということは、ここで待っていればターゲットは自分から現れるというワケね」

「あの子達にはかわいそうだけどね・・・」

複雑な気持ちを抱えながら、待ち続ける4人。そして無風の草原に風が吹いたその時

「クウオオオッ！クウオオオッ！」

突如、ジャギイ達がアプトノスの群れを取り囲んで鳴き始めた。取り囲まれてしまったアプトノス達は車サイズの体を使って、一点突破を試み始めた。すると群れの一端が群れと反対方向に走り始めた。ジャギイ達は反対方向に逃げた一端を優先して追い始める。

「あの、アプトノス囷になったのか！」

「群れを守るために一人が犠牲になる・・・そんな・・・」

「この世界にも生態系の仕組みがあるのね・・・」

「うえーん。あんなの悲しすぎるよー！」

ジャギイ達が囷となったアプトノスを包囲しながら近づいて来る。するとエリア3へ続く道から恐竜のようなモンスターがでてきた。ドスジャギイである。体の色はジャギイと同じで一回り大きい。何よりボスであると判断できる大きなエリマキ。ドスジャギイはアプトノスの前へ来ると、一気に首元へ噛みつき、絶命させた。間は3メートルは離れていた距離を一気に詰めたのだ。これを見ても、ジャギイとは比べ物にならない程の強さである。すると一頭のジャギイがキリト達の方へ吠え始めた。居場所がバレたらしい。こうなってしまうっては戦うしかない。

「俺が最初に突っ込むから、その後にストレア、アスナ頼む。リーファはシノンの護衛についてくれ。前のジャギイの時とは違う。気を引き締めていこう！」

キリトが双剣を構え頭の上で剣を交差させる。するとスキルの効果音が鳴り始めた途端、体が赤いオーラの様なものを纏った。これが双剣の特徴の一つ、鬼人化である。気力ゲージの減少を代償に、移動速度、攻撃力、攻撃速度を上昇させる事が出来る。キリトはドスジャギイの方を向くと一気に距離を詰め、左足を踏み出し、双剣をドスジャギイの胴体に向けてクロスする様に切りつける。先手を打たれたのを見越してか、ドスジャギイは巨体を勢いよく時計回りに回転して、払い飛ばそうとする。

「そんな分かりやすい攻撃に当たってたまるかよー！」

キリトもドスジャギイの動きに合わせて時計回りに動くことにより払い飛ばされることも無く、二刀流の様に乱舞を始める。

「よーしーアタシ達も行くよー！」

ストレアとアスナは、ボスであるドスジャギイに加勢しようとしているジャギイの群れに攻撃を仕掛けていく。ジャギイの群れまで走り、ギリギリの所で左足を前に移動させ、右足を少し曲げて力を入れた姿

勢で走るのをやめる。走ったことで生まれた速度と、背負った大剣を抜刀するエネルギー、システムのアシストの三つが合わさった破壊の塊をジャギイの群れへ叩きつけた。あまりの速さに残像が見え、その直後に凄まじいエフェクトと土煙が上がった。煙が晴れるとそこには、さつきまで10頭近くいたハズのジャギイが6頭にまで減っていた。かなりの攻撃力になっていたらしく、無残にも一刀の元に大半が倒されたらしい。すると残りのジャギイ達はそのままでは自分達もそこで死んでいる仲間と同じ末路を辿ると思ったのか、一目散に逃げてしまった。これにより、戦力を集中させることが可能になった。リーファとシノンもキリト達に加わっていく。

「せやああっ！」

アスナが片手剣を抜き放ち、キリトの対応に追われているドスジャギイの後ろ右足に切りつけた。切りつけた後に、赤色のダメージフェクトが横一線で現れる。

『グアアアッ!?!』

キリトにばかり気を取られていたドスジャギイはアスナの不意打ちに硬直してしまった。その硬直を皮切りに、気力ゲージが切れかけていたキリトはストレアとリーファに交代した。

「スイッチー！」

「後は任せて！キリト君！」

「行つくよ〜！てりや！」

リーファは左腰に付けた太刀を勢いぎまに抜き、居合切りの如くドスジャギイの顔面に一閃した。その一撃はドスジャギイを怯ませ、硬直時間を延ばす事となった。

ストレアは先ほどと同様、背負った大剣を抜刀切りをした後、振り下ろした大剣の刃を上へ返し、下から上へ切り上げ、上から下へ切りつけるのを繰り返し続けた。こうすることにより、高威力かつ手数を増やす事が可能となった。SAO時代からフロアボス攻略の重要なアタッカーとして活躍してきた経験がこのような技を可能としたのだろう。

『ヴォーヴォアヴォア！』

硬直が解けたのか、ドスジャギイはフィールド全体に響くのではないかと思う程の雄たけびを上げた。するとエリア3へ続く道からジャギイの群れが来た。応援を呼んだのだろう。

「くっ！仲間を呼んだのか！」

キリト達はドスジャギイから離れ、背中を向かい合わせにして円陣を組む。しかし、ジャギイの群れに何かが降り注いだ。その降り注いだ物体の一つがキリトの前に転がってきた。野球の硬式ボールのサイズをしたトゲトゲがの生えた鉄球だった。一体どこからこんなものが降り注いだのか辺りを見渡すキリト達。その持ち主はすぐそばにいた。

「雑魚の相手は私がするわ！キリト達はドスジャギイを！」

さっきの攻撃はシノンの援護だったのだ。

弓には多彩な利点がある。まず、弾切れを起こさない上にリロードの必要が無い。遠距離から攻撃をすることが可能。ビンを使う事で状態異常、攻撃力を上昇することができる。さらに攻撃までその利点は及ぶ。それが先程の鉄球の雨あられの正体、曲射である。大量の鉄球が封入された容器を曲射で打ち上げ、一定高度で爆発。中の鉄球が真下の対象目掛けて降り注ぐという物だ。射程距離は通常の矢より、下がってしまうが攻撃の手数と範囲が補う。

「ナイス援護だよ！シノンさん！」

「この世界の弓ってかなりスゴいわね・・・ALOでも再現できないかしら・・・」

矢の攻撃に見惚れているその中、ストレアが一早く気付く。

「あーっ！ドスジャギイがいない！」

「何だって!?!」

ジャギイを呼んだのは迎撃する為ではなく、自分が逃げる為の時間稼ぎだったのだろう。中々に狡猾である。しかし目の前には大量のジャギイの素材が。

「・・・ひとまず、休憩も兼ねて剥ぎ取りをしておこうか」

狩猟はもう一つ続きそうだ・・・

第5話

シノンの弓の性能に気を引かれている間に、ドスジャギイに逃げられてしまったキリト達。次を万全な状態で追う為に、腰のポーチに装備されている砥石を取り出して武器を研ぐ。しゃがんで切っ先を地面に、鏢を膝の上に乗せて砥石を根元から切っ先まで当てて研いでいく。初期の武器のせいとか、ギヤリギヤリという耳障りな音が砥石を当てる度に響いてくる。その時、アスナはSAOの時代を思い出す。リズに剣を研いで貰う時、上質な鉱石を使った武器は澄み切った鈴の様な音が鳴る事を思い出したのだ。リズがこの世界に来たらまず狩りではなく鍛冶を始めるだろうなと話すと、皆揃って笑っていた。

切れ味を回復させた次は体力の回復だが、ストレアが呟いた。

「そういえば、この世界の回復薬はどんな味がするんだろう?」

「いきなりどうしたんだ、ストレア?」

「だってアタシこのゲームについて少し調べただけで、ハンターって体力が減る度に回復薬を何度も飲むんだけど飲んでてツラくないのかなー、なんて」

「それはまあ・今は俺たちが本人の視点でやってる訳だから回復薬をダメージが受ける度に飲む訳だけどSAOとALOはポーションでGGOは注射で回復だからな・このゲームの回復薬の味自体知らないしな」

「じゃあ、飲んでみればいいんじゃない?体力が満タンでもペナルティがあるわけじゃないし」

「それもそうだな。よし!皆、3、2、1で行くぞ!」

アイテムポーチから回復薬の瓶を取り出すキリト達。回復薬は青汁より少し明るい色をしていた。

右手に瓶、左手は腰に当てる、風呂上りスタイルで一気に飲み干すキリト達。口の中に広がったのは、抹茶を甘くした様な味だった。後味は無く、すぐに飲み干す事が出来た。飲む前は苦いと思っていたキリト達だったが、予想とは違った味に驚く事になった。

「見た目と違って、飲みやすかったな・」

「プレイヤーの事をかなり考えているわねこのゲーム」

「SAOのポーシヨンはレモンとお茶を混ぜた様な味だったからね．．」

「私もログインした時、ポーシヨンを飲むの苦手だったな．．」
「かといって飲みすぎるといざという時に無くなっても知らないわよ」

この世界の回復薬の感想を言い終わったキリト達はドスジャギイが逃げたであろうエリア3へ向かった。あそこはジャギイ達の巣だったのでそこにいる可能性が高かったのだ。案の定、ドスジャギイはエリア3にいた。オマケに自分は寝ていて、その周りをジャギイ達が見張っていた。

これはチャンスだと思ったキリト達は一気に畳みかける事にした。
「よし、シノンに援護でリーファは護衛、俺とストレア、アスナで一気に入らめよう。これで大詰めだ！」

「ええー！」
「うんー」「了解！」「はーい！」

それぞれの武器を抜刀して寝ているドスジャギイに切りかかって行く。ジャギイ達がキリト達に気付いて周りを知らせる為に吠えているが遅い。キリト、アスナ、ストレアの三人はジャギイを無視してドスジャギイの方へ向かって行く。無視されたジャギイ達はシノンの矢によって倒されていった。ドスジャギイが騒ぎに気付いて頭をもたげた時には身体に無数の刃が食い込んだ瞬間だった。たまたらずに悲鳴を上げるドスジャギイ。しかし瀕死の状態にありながらその目は生きる事を諦めていない目をしていた。渾身の力で体を時計回りにしてキリト達を払い飛ばす。

「ぐあっ！」
「きゃっ！」
「いたっ！」

勢いよく払い飛ばされ、体力を減らされた三人。すぐに立ち上がった時には怒り状態でキリトの方に噛みつき攻撃を始めていた。

「追撃か！くそっ！」

噛みつき攻撃を受け、体力を3割まで減らされたキリト。次の瞬間、急に視界が揺れ始め、動く事が出来なくなってしまう。モンスターからの攻撃を二回以上連続で受けてしまうと気絶状態になってしまう、しばらくの間は動く事が出来なくなってしまう。そして気絶が解けない内に更に更に噛みつき攻撃をしようとしたドスジャギイにアスナが攻撃して中断させる。

「キリト君、回復を！」

「助かったアスナ！」

もう少しで初乙を飾りそうだったキリトを救ったアスナ。しかし彼女の攻撃はそこで終わりではなかった。攻撃が当たると、システムが検知して次のステップに進めていく。アスナは空中へ飛び、ドスジャギイに急降下。落下していくスピードと共に片手剣を振り下ろす。次の瞬間、アスナがドスジャギイの背中に飛乗った。乗り攻撃。高い場所から大型モンスターに飛び降り攻撃を仕掛けると飛乗って剥ぎ取りナイフで攻撃し続け、モンスターが動けなくなると技を繰り出して大ダメージを与える事が出来る。

『グワアアア！グワアアア！』

「くっ！このー！」

ドスジャギイは何か振り下ろそうと体をむやみやたらに暴れるが、アスナは負けじとしがみついて剥ぎ取りナイフをレイピアの様に振るうかの如く突き刺し続ける。

やがて抵抗する動きが鈍くなり、ついに止まってしまった。

「これで・・・終わり！」

盾と片手剣を交互にしてドスジャギイの頭部目掛けて攻撃し、最後に片手剣を一瞬のタメの後、突き刺した。

『ガアアアッ×』

体勢を崩したドスジャギイにすかさずストレアが駆け寄り、タメ切りのモーシオンを構える。

「やああっ！」

『ギャアアッ・・・ガア』

甲高い声を上げて、一瞬の間を置いて力の無い一鳴きをすると地面

にその巨体を落とすとした。次の瞬間、クエスト達成のBGMが鳴り響いた。

「良し！クエストクリアだ！」

「上手くいったね〜！」

「良いラストアタックだったわね」

「危なかった〜」

「ナイスアタックだったよ！ストレア！」

群のリーダーがいなくなったジャギイ達は一目散に逃げていき、残ったのはドスジャギイとキリト達だけになった。達成感に浸っているキリト達だったが、視界のタイムリミットを見ると慌てて剥ぎ取りを開始。完全に剥ぎ取った時は、15秒を切っていた。

「じゃあ、後は帰るだけだな」

「そうね。帰りが辛いのはこれで最後にしてほしいわ・・・」

「まあ、正式版で最初からかもしれないけど・・・」

「待って、アレは？」

リーファが指を指したのは、草に覆われたバスケットボールサイズの玉だった。さらに驚いたのは急に揺れたかと思えば、パツクリと割れてアルマジロの様な姿をした生き物だった。

「な、なんだこれ・・・」

「アルマジロじゃないよね・・・」

「待って。また何か来るわよ」

シノンが言った先から、さらに5、6匹のアルマジロ改めクサマジロが勢いよく転がり、同じように開いていた。

「なんなんだコイツら・・・」

「この子達もモンスターかな？でも可愛い！」

「まあ、ペットになりそうね」

敵意が無いと思いつながら近づいたキリト達だったが、草むらからまた何かが居るのかがガガサと音がする。

「なんだ、まだ居るのか」

安心し切って草むらに近づいたキリトだったが、出て来たのは視界いっぱいの草の玉だった。

「へぶっ!？」

「キリト君☒」

「キリト☒」

「なんなのアレ☒」

「お、大っきなクサマジロ☒」

仲間の声を聞きながら、0になりつつある体力ゲージと共にキリトは初のリタイアをした・・・